

第17回 日本臨床薬理学会 1996年11月1～2日 東京・京王プラザホテル

臨床薬理学，臨床薬剤学実習施行後の学生の意識調査

鈴木吉成*1 名倉弘明*1 西川三喜男*1
 姉崎健*1 橋本久邦*1 小菅和仁*2
 木村雅彦*2 西本雅彦*2 大橋京一*2
 吉見輝也*3 中島光好*4

目的

本学では平成6年度より、臨床における薬の使い方の基本原則を修得することと薬物の副作用等について理解することを主な目標とした臨床薬理学の実習を開始した¹⁾。7年度はさらに薬剤部も参加して、患者個人の薬物体内動態に基づいた投与設計ならびにオーダリングシステム上で医薬品情報を参照しながら処方入力する実習も組み込んだ。学生の実習及び臨床薬理学、臨床薬剤学に対する理解度とこれら実習項目に対する関心度を調査し、今後の実習・講義内容の検討資料とした。

方法

内科ポリクリを2週間交代で実習する5～6年生の1グループ4～5名を対象とした。このうちの2日間の半日(計6時間)を臨床薬理学に、さらに2日間の半日(計6時間)を臨床薬剤学の講義及び実習にあてた。本実習終了後、各質問について10点満点のスケールを用いてアンケート調査を実施した。

臨床薬理学は前年度と同様、内科の症例より薬物治療上の重要な薬剤の使い方等に対し討議を行った。

臨床薬剤学の投与設計では学生自ら被験者となりアミノフィリン錠200mg内服後、医師の指導の

もと消失相における2回の採血を行い、各自の血中テオフィリン濃度を蛍光偏光エンザイムイムノアッセイにより定量し、薬物動態値(消失速度定数及び消失半減期)を算出した。この値と母集団値(吸収速度定数及び分布容積)を用い、以下の設問に解答できるように説明を加え、レポートを提出させた。

- 1) 単回投与時の結果から多数回投与時(定常状態)における達する薬物動態値の算出。
- 2) 目標平均血中濃度を得るための投与量、投与間隔の計算。
- 3) 薬物間相互作用時の平均血中濃度の予測。

このほか、1コンパートメントモデルにおける単回投与、多数回投与時のワンショット静注、点滴及び経口投与について説明した。

処方に関しては、処方箋の形式と必要事項を解説した。当院オーダリングシステムで使用している小児用量の計算式について説明し、保険請求の観点から、適応症により投薬日数が制限されること等を解説した。オーダリングシステムを利用し医薬品情報を参照しながら、よりの確な処方を組み立てる実習をした。また処方時にコンピュータにより用法、分割・粉碎の可否、重複、併用禁忌等のチェックが行われるが、その意味あいと警告時の対処の仕方についても実習した。

結果及び考察

薬物治療に関する実習を今まで受けたことがないと答えた学生(回答者92人)は80%で平成6年度とほぼ同様であった。臨床薬理学・薬剤学実習

*1 浜松医科大学附属病院薬剤部
 〒431-31 浜松市半田町 3600

*2 浜松医科大学臨床薬理学

*3 浜松医科大学第二内科

*4 浜松医科大学薬理学

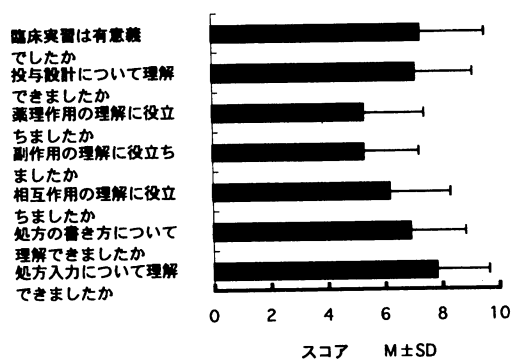


Fig.1 臨床薬理学・薬剤学実習アンケート

の必要性については82.6%の学生がかなり必要であると答えている。

また7年度に追加した薬の投与設計の理論に対する理解度は63.8%であった。これは投与設計の講義時間が短いためまだ十分理解できなかつたと推定された。TDMの必要性の認識に対しては73.3%であり、また投与設計に関する関心度は71.9%と高いため、投与設計に関する理解度を高めるために実習時間の延長が望まれる。また、実際の患者における血中濃度測定を通して投与設計する実習も必要と考える。

処方の書き方については66.3%の学生がかなり理解できたと答えた。オーダリングを利用した処方入力については71.8%がかなり良く理解したと答えた。コンピュータを利用して処方を書くことに対する理解度が高いことより、今後も正確かつ迅速な医療情報を参照できる処方支援機能の充実を図ることが求められていると考える。

また薬物治療においてその薬理作用、相互作用も含めた副作用、疾患別薬の使い方及び投与設計に対する関心度が比較的高いという回答が得られた。今回短時間に解説したこれらの項目について、さらに深く掘り下げた講義及び実習の必要があると考える。

一方、薬物治療に係わる論理的な問題（インフォームド・コンセント）あるいは臨床試験等に対する関心度はあまり高くないという結果が得られた。この点に関する卒前教育の充実が望まれた。

今回の実習について82.6%の学生がかなり有意義であったと答えたことより、今後も臨床薬理、臨床薬剤学の充実した講義及び実習が必要であると考えらる。

引用文献

- 1) 大橋京一ほか：臨床実習における臨床薬理学教育の新しい試み、臨床薬理27:131- 2,1996.